

長崎県におけるクエの漁業

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-06-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中川, 雅弘, 乾, 政秀, 堀田, 卓朗, 吉田, 一範, 服部, 圭太
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2014821

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



長崎県におけるクエの漁業

中川雅弘^{*1}・乾 政秀^{*2}・堀田卓朗^{*1}・吉田一範^{*1}・服部圭太^{*3}

(^{*1} 五島栽培漁業センター, ^{*2} (株)水土舎, ^{*3} 経営企画部経営企画室)

クエ *Epinephelus bruneus* は、日本では本州中部以南から東シナ海にまで分布し、沿岸域の岩礁域に生息している¹⁾。本種は白身で美味であるため、クエ鍋に代表されるように冬場の味覚としての需要が高い²⁾。本種は九州では「あら」、和歌山県では「くえます」、伊豆七島では「もろこ」などと呼ばれ、長崎県、福岡県、三重県、和歌山県、高知県などでは観光の目玉商材として珍重され、多くの観光客を呼び込むなど地域経済を支える貴重な漁業資源である。

長崎県地方卸売市場（以下、長崎魚市場）に水揚げされたクエ活魚は、2001年から2008年までの月ごとの単価の平均（範囲）が5,972円/kg（3,674～11,709円/kg）の高値で取引されている³⁾。このようなことから、長崎県内の漁業関係機関では、本種の資源増大を図り、漁業者の収入増加のための種苗放流を望む声が多い²⁾。

資源管理あるいはそのツールの一つである栽培漁業を実施するには、対象となる資源の範囲、漁場ごとの漁獲量などの情報を基に、資源の管理単位あるいは放流効果調査のエリアを設定しなければならない。このような中で、齋藤ら²⁾は長崎県の下五島周辺海域のクエの漁業実態調査を行い、漁獲統計に記載されていない本種の漁獲量、漁法および流通などを明らかにし、これらの基本情報を得ることが可能であることを示した。

このことから、本報では、漁獲実態調査のエリアを長崎県全域に拡大し、各漁協でクエ漁業に関する聞き取り調査を実施し、クエの漁業が実施されている地区とその漁獲量、経営体数および出荷先について知見が得られたので報告する。

材 料 と 方 法

長崎県内の漁業協同組合（以下、漁協）の数は、対馬地域に12、壱岐地域に5、上五島地域に10、下五島地域に3、本土地域に41、合計71が存在する（図1）。2002年から2006年にかけて、クエの延縄漁業が実施されている漁協および地区において、経営体数、漁場、漁期、漁獲量および出荷先についての聞き取り調査を行った。なお、クエの漁獲は主に延縄漁業で実施されているため²⁾、経営体数については延縄漁業を調査対象とした。

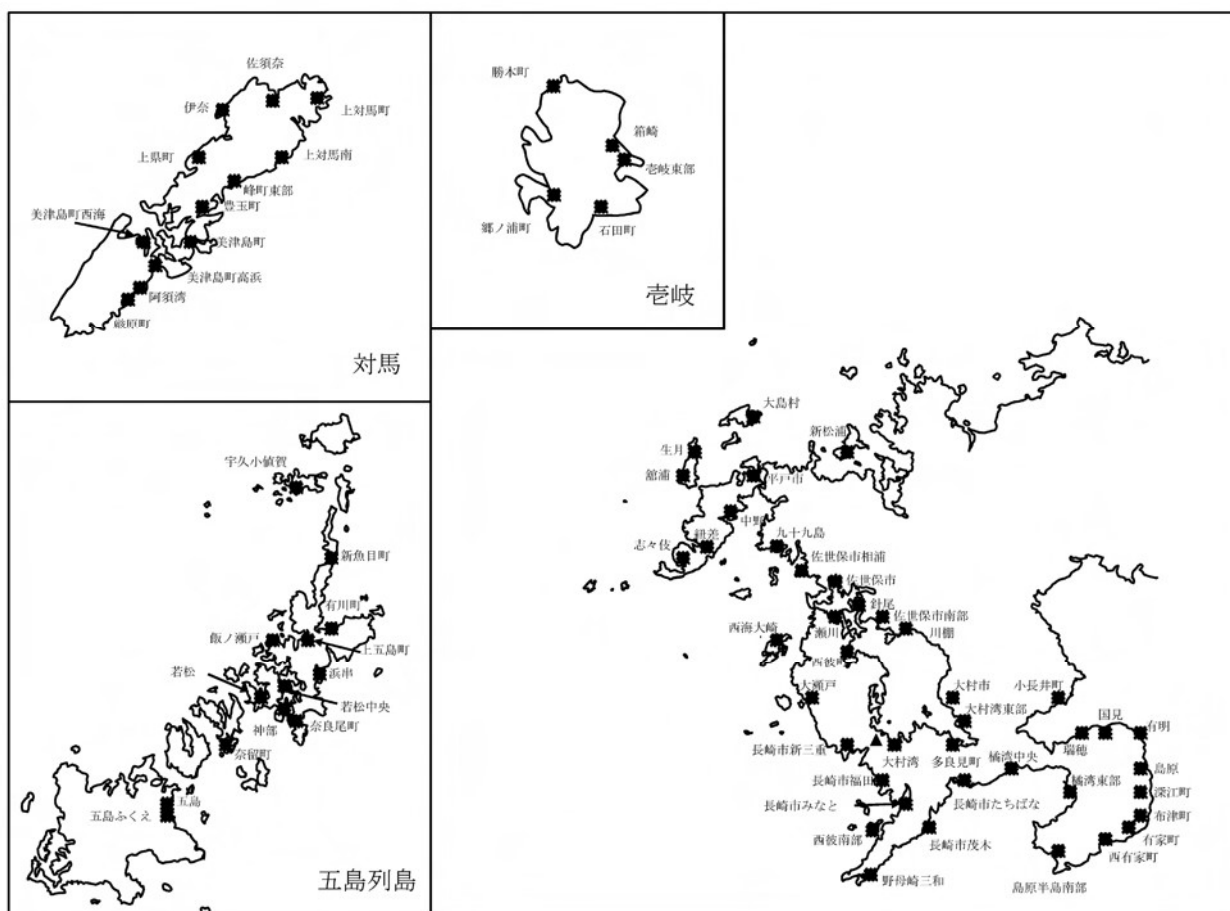
結 果

クエ延縄漁業の経営体数と経営実態の変遷 今回の調査で確認されたクエ延縄漁業を営む漁協は23、漁業地区は30、経営体数は180であり（表1）、長崎県内の71の漁協のうち、32.4%を占めていた。また、クエ延縄を営む漁業者が所属する漁協は、平戸を島とした場合には大瀬戸町漁協を除くと、すべて離島域に位置していた。

漁業地区別にクエ延縄漁業が開始された年代を調べたところ、クエ延縄漁業がこのように県下全域に広まったのは最近のことであることがわかった（表1）。1950年代からの長い歴史を有する漁業地区は、対馬地域の水崎地区、平戸島の前津吉地区、本土地域の大瀬戸地区である。水崎地区は、広島からの移住者の集落で瀬戸内海の延縄技術が発展したものである。一方、大瀬戸地区は、ブリ延縄にクエが混獲されたことから発展したもので、両地区のルーツは異なる。これらの地区に次いで古い歴史を有するのは、壱岐地域の箱崎地区、同初瀬地区で、壱岐地域の八幡浦地区、下五島地域の奈留島、三井楽地区、本土地域の志々伎、宮之浦、度島地区では1990年代から始まり、その他の地区は10年以内に開始されていた。

クエ延縄漁業の漁期 クエ延縄漁業の主な漁期は10～11月であるが、北方に位置する対馬地域、壱岐地域では、ほとんど年内に漁業を終了するのに対し、南方に位置する上五島および下五島地域では、翌年1～2月頃まで漁業が営まれていた。クエの漁期は、年末を中心とした3ヶ月程度に限定されていることから、その他の時期には様々な漁業を兼業していた。対馬地域では、クエ以外の延縄漁業、壱岐地域では、ワララの曳釣、ブリ、マグロの一本釣、イカ釣などの釣り漁業、上五島および下五島地域では、アマダイ延縄、イサキ釣、タチウオ、ヨコワ、ブリ、ヒラマサなどの曳釣、タコ壺および刺網漁業が営まれていた。本土地域では、ヒラメ刺網、延縄、タコ壺、イサキ釣などの漁業が営まれていた。

各地域におけるクエ延縄漁業の漁場 長崎県内でクエ延縄漁業を営む各漁業地区の漁場の海域を調べたところ、対馬地域の漁業者は、対馬の周辺海域で操業していた。水崎地区の漁業者は、対馬全域で操業しているが、その他の漁業地区の漁業者は、それぞれの地先



を中心に操業していた。また、対馬海域は本土地域の志々伎地区および大瀬戸地区の漁業者も利用していた。

沓岐地域は、沿岸 2 マイル以内では島外船の操業を認めず、1 マイル以内については地先権を優先している。従って、沓岐の各漁業地区の漁業者は、原則として地先権がある漁場で操業していた。

上五島地域の小値賀地区および若松地区の漁業者は、上五島海域と下五島海域を漁場としていた。一方、上五島海域は、下五島地域の奈留地区および三井楽地区、本土地域の前津吉地区および大瀬戸地区の漁業者も利用していた。

下五島地域の奈留地区、三井楽地区および大浜地区などでは、原則として五島列島周辺を漁場としているが、三井楽および大浜地区の一部の漁業者は、男女群島で操業していた。一方、下五島海域は、上五島地域、本十地域の大瀬戸地区の漁業者が利用していた。

本土地域の漁業地区のうち、度島および大島地区の漁業者は、地先の漁場を利用しているが、本土地域の漁場は限定されるため、志々伎地区の漁業者は主とし

て対馬海域、大瀬戸地区の漁業者は、対馬から鹿兒島県屋久島・種子島方面についても遠征していた。また前津吉地区の漁業者についても、県外を含む広範囲の海域を漁場として利用していた。

漁獲量および漁獲金額 各漁協の水揚げ資料およびヒアリング結果に基づいたクエの漁獲量および漁獲金額の推移を地域別に示した（表2，3）。長崎県内のクエの漁獲量は、2002年の61.0トンから年々増加傾向にあり、2006年には96.3トンとなり、1.6倍に増加した。漁獲金額は、2002年の2.9億円から年々増加して2006年には4.4億円となり、1.5倍に増加した。長崎県内の主要産地は、対馬地域の水崎地区、上五島地域の小値賀地区、下五島地域の三井楽地区、本土地域の大瀬戸、前津吉および志々伎地区であった。

産地別の出荷先 産地別の出荷先を表4に示した。長崎県内で漁獲されたクエは、市場に直接出荷、長崎県漁連に販売、地元の活魚問屋に販売、関西方面等の消費地に直接出荷の4つに大別された。産地別にみると、対馬地域では、福岡魚市場および福岡中央市場を中心に出荷しており、一部は北九州中央卸売市場に出

表1 長崎県下におけるクエの延縄漁業の経営体数と経営実態の変遷

地域	漁協名	漁業地区名	～1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年	2005年
対馬	上対馬町	上対馬						○	5
	佐須奈	佐須奈						○	1
	豊玉町	水崎	○	○	○	○	○	○	12
	美津島町	大船越							1
	上対馬南	琴							1
	美津島町西海	屋ヶ浦						○	7
	伊奈	伊奈						○	9
	厳原町	曲						○	3
壱岐	勝本町	勝本							2
	壱岐東部	八幡浦					○	○	9
	箱崎	箱崎		○	○	○	○	○	2
	郷ノ浦町	小崎							20
	郷ノ浦町	初瀬		○	○	○	○	○	5
上五島	宇久小値賀	小値賀							22
	宇久小値賀	宇久島							3
	若松町中央, 神部	若松							6
下五島	奈留町	奈留島					○	○	9
	五島	坪							3
	五島	玉之浦							2
	五島	岐宿							3
	五島	三井楽					○	○	18
	五島ふくえ	奥浦							2
	五島ふくえ	大浜							3
本土	志々伎	志々伎					○	○	6
	大島村	大島						○	4
	大瀬戸町	大瀬戸	○	○	○	○	○	○	15
	志々伎	宮之浦					○	○	3
	平戸市	前津吉	○	○	○	○	○	○	2
	平戸市	津吉							1
	平戸市	度島					○	○	1
合計									180

数字：経営体数，○：経営実態あり

表2 各地域におけるクエの漁獲量の推移

地域／年	2002	2003	2004	2005	2006
対馬	19,734	20,809	24,522	31,200	26,370
壱岐	7,695	6,109	10,819	8,761	9,150
上五島	4,696	10,055	8,826	7,974	12,825
下五島	11,418	17,840	19,116	20,149	24,234
本土	17,500	18,436	26,972	21,941	23,677
合計	61,043	73,249	90,255	90,025	96,256

単位:kg

表3 各地域におけるクエの漁獲金額の推移

地域／年	2002	2003	2004	2005	2006
対馬	77,818	77,806	87,686	106,832	101,780
壱岐	30,848	30,410	33,612	32,386	30,549
上五島	19,935	45,021	47,448	44,873	70,994
下五島	65,689	85,694	77,974	117,899	116,561
本土	99,169	98,057	129,177	110,806	124,144
合計	293,459	336,988	375,897	412,796	444,028

単位:千円

荷していた。また、小規模の産地は、地元の活魚問屋に出荷していた。壱岐地域では、福岡魚市場に主に出荷し、一部では長崎魚市、北九州中央卸売市場に出荷していた。また、郷ノ浦町漁協では、産地市場を開設しており、鮮魚を中心に出荷され、そのうち一部は島内に流通していた。上五島地域のうち、小値賀地区は、主として長崎魚市、佐世保魚市に出荷しており、一部は福岡中央魚市に出荷していた。また、若松地区では、活魚については長崎魚市、鮮魚については福江魚市に出荷していた。下五島地域の各地区では、主として長崎魚市に、一部を佐世保魚市および福江魚市に出荷していた。さらに、近年では、関西方面等に直接出荷することもある。本土地域のうち大瀬戸地区では、主に関西方面等へ出荷していた。その他の地区では、福岡魚市、福岡中央魚市、北松魚市および県漁連へ出荷していた。

出荷先の市場におけるクエの水揚げ重量および金額

長崎県内で漁獲されたクエは、長崎魚市、佐世保魚市、長崎漁連、福岡魚市および福岡中央魚市にそれぞれ主に水揚げされていた（表5）。2002年にこれらすべての市場に水揚げされたクエの重量は84.1トンであったが、2006年には140トンとなり、1.67倍に増加した。水揚げ金額についても、水揚げ重量と同様の傾向を示し、2002年の合計が4.2億円に対して2006年は6.9億円となり、1.64倍に増加した。特に、長崎魚市場における水揚げ量の増加は顕著であり、2006年のクエ全体の水揚げ重量（水揚げ金額）に対する長崎魚市各市場の占める割合は、46.4%（50.8%）と高く、以下福岡魚市が31.6%（30.9%）、福岡中央魚市が10.1%（6.6%）、佐世保魚市が6.2%（6.0%）、長崎県漁連が5.7%（5.8%）の順となった。

表 4 産地別の出荷先

地域	漁協名	漁業地区名	対馬	杵岐	小倉	福岡	北松	田平	佐世保	長崎	下五島	関西
			活魚 問屋	郷ノ浦 市場	北九州 中央	福岡 魚市	福岡 中央	県漁連	佐世保 魚市	長崎 魚市	福江 魚市	活魚 問屋
対馬	上対馬町	上対馬			△	◎						
	佐須奈	佐須奈				◎						
	豊玉町	水崎				◎	◎					
	美津島町	大船越					◎					
	美津島町西海 伊奈	屋ヶ浦 伊奈	◎									
杵岐	厳原町	曲	◎				◎					
	勝本町	勝本				◎						
	杵岐東部	八幡浦				◎						
	箱崎	箱崎			△	◎				△		
	郷ノ浦町	小崎		△		◎						
上五島	郷ノ浦町	初瀬		△		◎						
	宇久小値賀	小値賀				△			○	◎		
	若松町中央、神部	若松								○		
	奈留町	奈留島								◎		
	五島	三井榮							○	◎	○	○
下五島	五島	漁協管内								◎	○	○
	五島ふくえ	漁協管内							△	◎	○	
	志々伎	志々伎				○	○	◎		○		
	大島村	大島				△	△	○				
	大瀬戸町	大瀬戸				△				△		◎
本土	平戸市	前津吉				◎	○					
	平戸市	度島					△	○				

◎: 主な出荷先, ○: 出荷先, △: 希に出荷

表5 各市場の水揚げ重量および金額の推移

市場名		2002年	2003年	2004年	2005年	2006年
長崎魚市	重量(トン)	30.7	31.9	52.2	48.2	65.0
	金額(百万円)	168	147	213	241	349
佐世保魚市	重量(トン)	7.0	9.5	11.3	3.4	8.7
	金額(百万円)	40	41	42	18	41
長崎県漁連	重量(トン)	0.0	0.0	0.0	3.0	8.0
	金額(百万円)	0	0	0	15	40
福岡魚市	重量(トン)	35.2	40.0	47.3	42.4	44.2
	金額(百万円)	178	200	212	208	212
福岡中央魚市	重量(トン)	11.2	12.8	15.1	13.5	14.1
	金額(百万円)	37	42	44	44	45
合計	重量(トン)	84.1	94.2	125.9	110.5	140.0
	金額(百万円)	423	430	511	526	687

考 察

長崎県におけるクエの漁業の特徴 長崎県内のクエ延縄漁業は、離島域を中心にほぼすべての地区で行われ、多くの漁業者がクエ資源を利用していることが明らかになった。また、経営体数についても近年増加傾向にあるが、これは他種における魚価が近年、低迷している中で、クエの魚価は高く、収入増加を狙った漁業者が離島域を中心に増加しているためと考えられた。また、クエは、鍋物で代表されるように、冬季の限定した時期に需要が高いこと、冬季以外には他魚種の漁業が行われていることから、クエの延縄漁業の漁期は限定されているのが特徴である。齋藤ら²⁾は、下五島および大瀬戸地区におけるクエの漁期が10月～2月であることを明らかにしたが、今回の調査の結果から、長崎県全域で、ほぼ同じ時期に漁期が設定されていることがわかった。

クエの水揚げ量の増加要因 2006年の各漁協の水揚げ重量の合計は、2002年の1.6倍（表2）、金額については1.5倍に増加していた（表3）。また、主要市場の水揚げ重量についても、同様に1.7倍、金額についても1.6倍の増加が認められた（表5）。水揚げ量が増加する要因としては、クエ資源量の増加、あるいは漁獲努力量の増加などが考えられる。前者については、資源学的な調査を実施していないため、言及することはできないが、個々の漁業者の聞き取り調査からは、1回の操業あたりの漁獲尾数が大幅に増加していることはないようである。一方、各漁業地区の経営実態をみ

ると、経営体数の2000年以降の増加が伺えた（表1）。従って、本調査の期間中にみられたクエの水揚げ量の増加は、単純な資源の増加について否定することはできないが、漁獲努力量の変化が水揚げ量の増加に強く影響を与えていると考えられた。今後、水揚げ量および経営体数の調査を継続的に実施するとともに、漁獲物調査を行い、クエの体長組成の経年変化およびCPUEなど資源学的な調査を実施することが重要な課題である。

漁場および水揚げ市場からみた調査エリアのゾーニング クエ資源を持続的に利用するための手段として、資源管理、そのツールの一つである栽培漁業が有効と考えられるが、これらを実施する場合には、対象とする資源の範囲および調査エリアのゾーニングを行う必要がある。今回の調査により、各地区の漁場は、本土地域の大瀬戸、志々伎および前津吉地区を除くと、概ね地先周辺であることがわかった。また、漁獲されたクエについては、対馬および壱岐地域では、主に福岡魚市場、その他の地区では概ね長崎魚市場に水揚げされることがわかった（表4）。福岡および長崎魚市場に水揚げされたクエは、水揚げ全体に占める割合が約80%であることから、この2つの市場での調査体制の構築が可能になれば、長崎県海域でのクエの漁獲実態を把握することができると考えられた。今回の調査によって、概ねクエの漁場が把握されたため、今後は、ダート標識を用いた放流試験および再捕報告調査を実施して、放流後の移動範囲を調べるとともに遺伝学的集団構造を調べ、これらを総合的に判断して、対象資

源および調査エリアを決定することが重要であると考えられた。

文 献

- 1) 瀬能 宏 (1993) ハタ科. 「日本産魚類検索」(中坊徹治編) 東海大学出版会, 東京, 601-603.
- 2) 齋藤貴行・本藤 靖・服部圭太 (2005) 長崎県内におけるクエの漁業実態と流通について. 栽培漁業センター技報, 4, 56-60.
- 3) 中川雅弘・本藤 靖・堀田卓朗・吉田一範・服部圭太 (2010) 長崎魚市場資料からみたクエの漁獲傾向. 栽培漁業センター技報, 11, 29-33.
- 4) 中川雅弘 (印刷中) クエの栽培漁業事業化に向けてのアプローチ, クエの社会的ニーズと漁業実態. 豊かな海, 社団法人全国豊かな海づくり推進協会, 東京.